

アフリカ現代史I

第5回

ヨーロッパ列強の進出と植民地支配

1 キリスト教の布教と内陸部の探検

(1) 奴隷貿易廃止

- 奴隷貿易 18C頂点、公的には19C(1815)廃止
(要因)

- * 思想上の変化 啓蒙思想

- * 経済的变化 産業革命→賃金労働、市場としてのアフリカ

イギリス 海上パトロール 奴隷船拿捕

➡ 19Cも奴隷貿易は続いていた (南大西洋ルート、エチオピアから陸地ルートで紅海を経てアラビア半島へ)

リベリア、シエラレオネ

解放奴隷の移住による国家建設

(2) ヨーロッパ人によるアフリカ大陸探検と内陸地進出

ヨーロッパのアフリカに対する関心 沿岸から 内陸地へ

- * 探検家の活躍

J.スピーク、D・リビングストン（英から支援）

H.M. スタンレー（ベルギーから支援）

もともとは科学的興味や人道主義

- * 交易の拡大 象牙、落花生、カカオ、油ヤシ

☞ 列強の領土的野心＋キリスト教布教 カソリック(仏)

プロテスタント(英)

- * 探検家 内陸地の首長や長老に出会うと懐柔、勢力圏を確保

(3)ヨーロッパにおける技術の変化

- 19Cに工業技術の革新

1) 医療 19C半ば頃まで アフリカでのヨーロッパ人の死亡率高い

- 1840代 キニーネの定期的服用

- 1874 アサンテの首都クマシに派遣された2500人の兵士 2カ月滞在で致死率2%

- 1910代 マラリアや黄熱病の原因発見

2) 製鉄技術の進歩 安価で高品質の鉄製品生産 →武器の変化

- 19C半ば頃 フリントロック・マスケット銃

- 1880代 ライフル銃の改良→弾倉付ライフル銃

3) 統治技術 1780代～1880代 ヨーロッパでは新しい統治技術定着

- イングランド 19C半ばまでに地方政府と議会 中流階級の投票者の意見を反映するよう改変、貧民救済のための市民社会サービス、都市では警察サービス、工場の監督
 - 19Cヨーロッパ 植民地を含む帝国体制
 - 人種主義的考え 植民地体制の組織や運営方法に重大な影響
- ←「産業の時代」 自らの世界的地位を再規定、自らの価値観・文化を上位に、それ以外のものを低く評価
- ←19C初 生物学の潮流

2 アフリカの分割

(1) アフリカ分割の諸原因

1) ヨーロッパの政治情勢

分割競争 19C半ば以降の活性化

- ロシア・トルコ戦争、イタリア・ドイツ統一
- 1870普仏戦争、ドイツの工業化とドイツ帝国の台頭

2) ヨーロッパ諸国間の貿易と投資の競争

- 未開発の海外領土の獲得

☞ 現実には 1880代 イギリスの対アフリカ輸出(5~6%)、アフリカからの輸入(5%未満)

- 3)ヨーロッパ各国が軍事力と政治力を誇示するため
- 広大な植民地獲得 帝国の覇権の証拠
- 例)イギリス 1880代 ナイジェリアのニジェールデルタの首長たちと条約調印
- ヨーロッパ諸国 海外領土 国家の威信を高めるための利用
(例1)イギリス 1882 エジプトのスエズ運河支配
- (例2) フランス 西スーダン(現セネガル、マリ、ブルキナファソ、ニジェール)

4) 文化的理由

- 文化面でヨーロッパ人が優れているという信念＝アフリカを征服する権利
- 白人の優越性に対する信奉 「文明化の使命」としてアフリカ分割のために利用された
- 1859ダーウィン 『種の起源』→「社会的ダーウィン主義」(適者生存の原理)がしばしば引用される

(2) 分割のプロセス

- アフリカ分割に関与したヨーロッパ主要国：イギリス、ポルトガル、フランス、ドイツ
- 最大の利益を得たのはイギリスとフランス
- オランダ & デンマーク 西アフリカから撤退
- ドイツ 1884以後関与
- ベルギー国王レオポルド2世：1876 アフリカへ強い関心示す、国際会議開催、コンゴ地域の遠征を支援する協会を組織
- ポルトガル
- フランス：拡大局面へ、コンゴの各地を探検、エジプトでイギリスと二重支配に参加、西スーダンでの武力行使の気配

- 1884・11・15～1885・2・26 ベルリン会議 ドイツが議長国
- 13か国参加：イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、アメリカ、ロシア、オランダ、オーストリア＝ハンガリー、スペイン、ポルトガル、スウェーデン＝ノルウェー、オスマン・トルコ、ベルギー
- 二大基本原則を合意

①勢力範囲の原則：

②実効支配の原則：

◎ヨーロッパ列強によるアフリカ分割のルール確定、アフリカ人の存在を完全に無視

「一大陸の国家が寄り集って、他の大陸の分割と占領についてこれほど図々しく語ることが正当化されると考えたというのは世界史に前例がない」

（ケニア人歴史家 オゴト）

分割競争 激化←参加国 多くの地域で「実効支配」の樹立をめざす

- 特に内陸部へ支配の拡大をしようとする（沿岸部のプレゼンスが隣接後背地の支配を意味するのか定かではなかったため）
- 1890 ブリュッセルで国際会議

1885 植民地獲得のための2つの戦略

①条約の調印

- ヨーロッパ列強代表とアフリカ人首長の間で調印
 - ヨーロッパ列強間で相互に調印 境界を画定、勢力範囲を規定
- ### ②軍事攻撃 軍隊を利用し、地域を制圧し、アフリカ人を降伏させる

(3) アフリカ分割の実態 ① 南部アフリカ

特殊事例: ヨーロッパ本国もしくはイギリスに帰属すると考える人々とボーア人(アフリカーナ)の社会に属すると考える人々の対立

イギリス

- 1877 南アフリカ(トランスバール)共和国併合
- 1879 イギリスとズールー人国家敵対
- 1881 ボーア軍 イギリスを破り、イギリスは独立承認 (トランスバールとの対立続く)
- 1890 セシル・ローズ
- 1899 アングロ・ボーア戦争(南アフリカ戦争) イギリス かくとうじて勝利
- 1910 南ア連邦 イギリス帝国の自治領として独立

②西アフリカ

フランス 1870普仏戦争敗北後積極的に関与

- 1879 セネガル 鉄道建設を計画
- ウマリア帝国(ギニア・コナクリから北ゴールドコーストまで)、サモリ・トゥーレ帝国と戦争

イギリス

- ガンビア海岸保護領から勢力圏拡大
- シエラレオネ、ゴールドコーストに植民地建設
- ニジェール川デルタ地帯

③北東部アフリカ

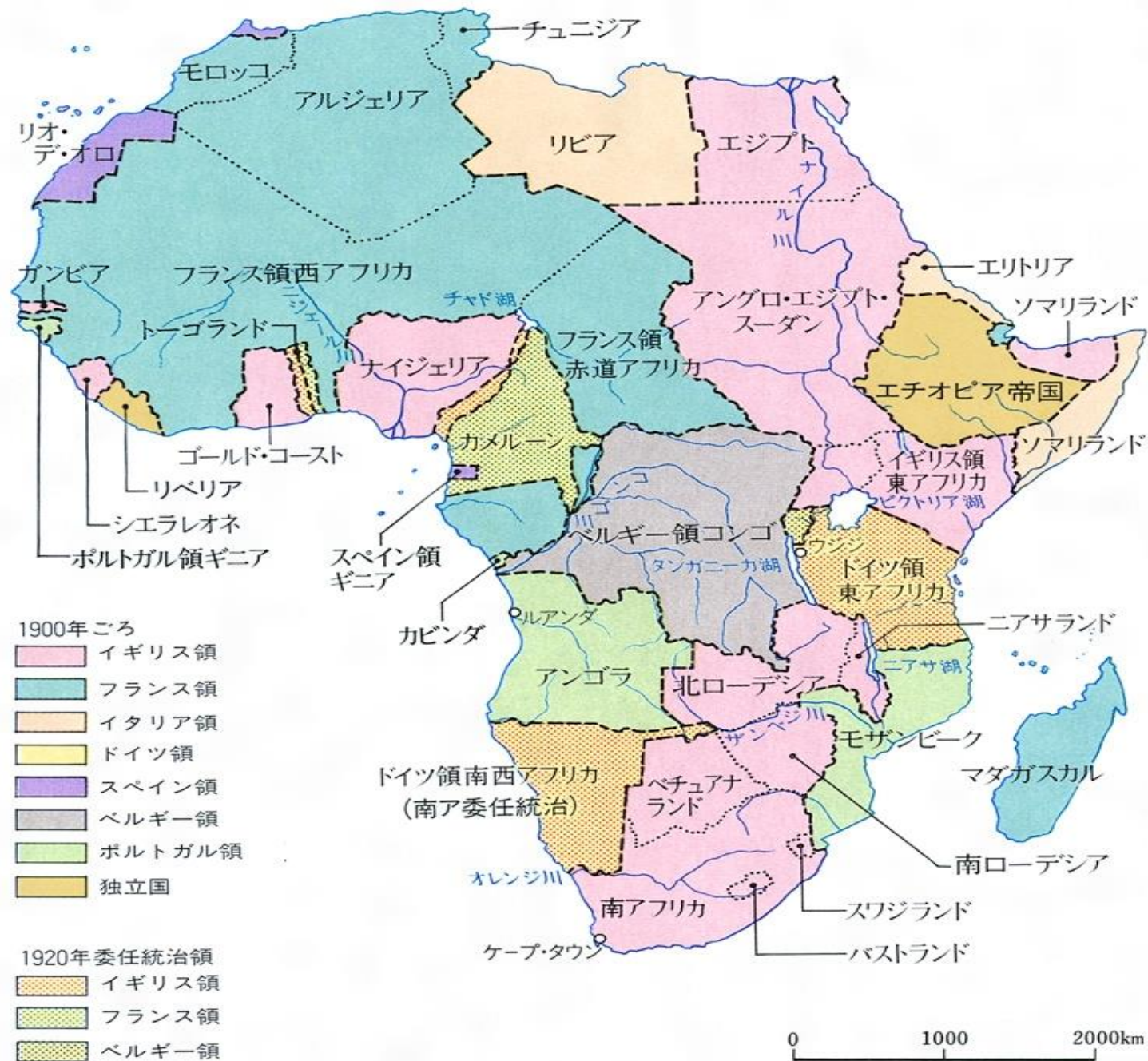
イギリス エジプトへの関心

- 1880頃 ヨーロッパによってインドへの生命線(喜望峰とスエズ運河)が遮断されることを懸念
- ロシアに対抗してトルコを守りつつ、トルコのエジプト介入をおさえることを目的として行動
- オラビー・パシャの反乱の鎮圧 スエズ運河の安全確保を理由にエジプト政府の運営に介入
- スーダン支配 エジプト関与の副産物

④コンゴ盆地 & その他

レオポルド2世

- 1867「中央アフリカの開発と文明化の国際協会」設立
- 国王の圧政・搾取 国際的な非難→1908ベルギー政府の管理下に
フランス：中央コンゴ植民地、コンゴ共和国となる地域へ
他のヨーロッパ諸国 危機感を抱いてアフリカ進出
- ドイツ：1884 トーゴランド、カメルーン、南西アフリカ→ベルリン会議直
後 ドイツ領東アフリカを獲得
- ポルトガル：アンゴラ、モザンビーク、ギニア、カーボヴェルデ、サントメ、
プリンシペを獲得



3 アフリカ側の対応

- 1880年～1910年 アフリカ大陸全土 ほぼヨーロッパ諸国の支配下に
この侵略にアフリカ人たちはどのような対応を行ったのか？

☞ 初期のヨーロッパ人の説明

① 侵略と支配を拒絶

- 西アフリカのアサンテ、南アのズールー
- 西ウガンダ、北ニジェールでは1920代まで抵抗

② 巧みにヨーロッパと同盟を結び領土の保全や拡張をねらうケースあり

(1) 抵抗の様々な形

- * 西アフリカ 「防衛的西洋化」
 - フォンテ連合・アクラ共和国、アベオクタ:エクバ連合運営会議設立
- * イギリス人に奉仕しつつ、自らの力を温存
 - 1900 ウガンダ協定 イギリス支配に対するガンダ人の従属とひきかえに「ブガンダ王国」のカバカのタイトルや地位の存続
- * 植民地化以前の政治体制を持つアフリカ人国家存続
 - ザンジバル・北アフリカのイスラーム諸国 ヨーロッパ国際法下で公式な政体と認知される
- * イギリスとボーア人の対立を利用
 - レソト王国・スワジランド王国

* 時を得た降伏と協力で権限を維持

- 北ナイジェリア ソコト首長国 👉 王立ニジェール会社 ベルエ川とニジェール川の水域内のアフリカ人領土を確保する目的で、1890年代にイロリンとヌペへ侵攻

* 一旦敗北しても、抵抗が続く場合も

- 南ローデシア(現ジンバブウェ): 1890イギリス南アフリカ会社 ショナの土地を抵抗なく制圧👉ンデベレは強い抵抗→1896～97 ショナとンデベレ反乱

* 非公式同盟のネットワークによる抵抗

- インド洋沿岸のアフリカ系アラブ人、ブシリ・イブン・サリーム ドイツ東アフリカ会社の進出やドイツ人の交易拠点に対する抵抗を組織
- 様々な民族からなる10万人が戦闘に加わる

- ドイツ領東アフリカ
- 1905 ドイツが南東タンザニア平定
- 1905～07 マジマジの反乱

このような征服を可能としたのは

* ヨーロッパ側の技術(特に軍事技術)の進歩

(2) 統治する側への教訓

- 蜂起に対する恐怖
- 抑圧のコストの大きさ
- 虐待的統治の誤りの認識
- 統治方法の改革
- アフリカ人社会に対する支配力の限界の認識

主な参考文献

- 井野瀬 & 北川『アフリカと帝国』晃洋書房
- 宮本 & 松田『新書 アフリカ史』講談社現代新書
- 北川 & 高橋『現代アフリカ経済論』ミネルヴァ書房